

[試験紹介]

耐病性品種を侵すイチゴ萎黄病菌の発生実態

イチゴ萎黄病は、土壌伝染性の難防除病害で、本病害の耐病性品種の育成には、これまで「アスカウェイブ」由来の抵抗性遺伝子を利用してきました。しかし近年、この抵抗性を打破する本病の菌株が確認され、このことは、菌の持つ特定の遺伝子の有無と関係していることも明らかになっています。そこで、当センターでは、**抵抗性打破菌株の県内分布を明らかに**するため、県内いちご栽培ほ場から分離されたイチゴ萎黄病菌の遺伝子調査を行っています。

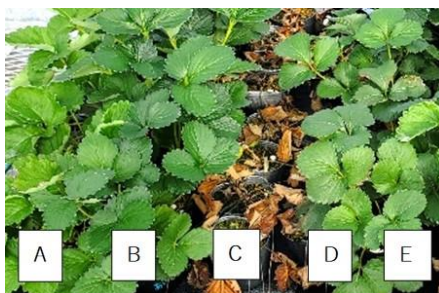
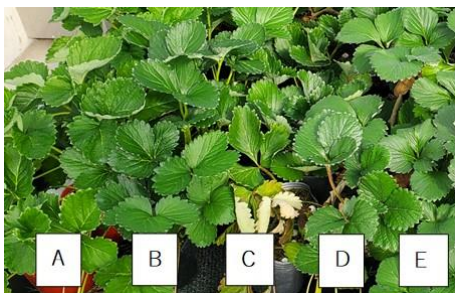


写真1 萎黄病菌（従来の菌） 写真2 萎黄病菌（抵抗性打破菌株）

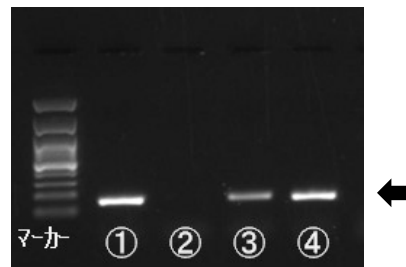


図 泳動パターン

※①～④は異なる萎黄病菌株を供試。矢印のバンドを有する菌株は、抵抗性打破菌株の可能性がある。

※A～Eは異なるいちご品種。抵抗性打破菌株を接種した場合、品種間差はあるが、生育不良や枯死株が認められる。

(病理昆虫研究室)

[試験紹介]

汚泥肥料活用による化学肥料減肥指針の確立

日本は肥料原料の大部分を海外に依存しており、近年では世界情勢の不安定化やエネルギー価格の上昇などから、化学肥料原料の国際価格が上昇し、肥料価格が高騰しています。そこで現在、**国内未利用資源**である汚泥を利用した「**汚泥肥料**」が注目されています(写真1)。

しかし汚泥肥料はその**肥効率**が明らかでなく、その利用は汚泥発生量の1割程度と進んでいません。

当センターでは、汚泥肥料の利用拡大に向けて、水田と畑地における**肥効率の調査**と、水稲や葉物野菜を用いた栽培試験を実施しています(写真2)。

汚泥はこれまで、建材の一部や廃棄物として処理されてきましたが、今後は**窒素**や**リン酸**を含む**資源**として、**有効活用**できるよう、試験を進めていきます。



写真1 汚泥肥料現物



写真2 水稲栽培試験の様子

(土壌環境研究室)